

書評

世界の化石遺産 化石生態系の進化

P.A. セルデン, J.R. ナッズ 著 鎮西清高訳
朝倉書店

2009年11月15日発行
160ページ

定価4,900円(税別)
ISBN978-4-254-16261-5

「恐竜など化石の話はおもしろいけれど、古生物学の教科書となると、ちょっと」。そんな方々に待望の教科書の訳本が出ました。古生物学の教科書と言えば、難しい記載や分類ばかりという印象がありますが、この本はユニークです。この本で取り上げているのは、世界各地に散らばる化石ラガシュテッテンと呼ばれる、地球生命史に開いた「窓」です。これらの「窓」では、普通は化石に残らない軟体性生物の化石や、筋肉や内臓などの軟体部が偶然に保存されていて、それらの化石の研究によって生命の歴史や進化の理解が画期的に進んできたという経緯があります。つまり、化石ラガシュテッテンとは、古生物学にとって貴重な化石産地のことなのです。

この本ではその中から時代の異なる14産地を取り上げています。一つの産地で一つの章を構成するというオムニバス形式で書かれているので、読者は好きなどころだけ「つまみ食い」をしても、一つの産地について完結した話を読むことができます。各産地は時代順に並べられていて、全体を通読したならば生物進化についての流れを系統的に概観できるようになっています。その結果、化石ファンから専門家まで、それぞれのレベルで興味を持って本書を読み進めることができます。

それぞれの化石産地については、まず進化史上の意義など背景についての説明の後、その産地の発見など研究史、堆積学的な背景、層序と古環境、生物群の紹介、古生態についての考察、と続き、次いで同じ時代の他の化石ラガシュテッテンとの比較が述べられ、最後に参考文献が記載されています。この構成がまたユニークで、読者は個々の化石の解説に入る前に、すでに化石のドラマに引きつけられています。特に産地の発見の歴史が、私のような古生物学にあまり詳しくない者にもおもしろいのです。例えば、アノマロカリスやオパビニアなどの奇妙キテレッツな古生物群集で有名な、カナダのカンブリア紀のバージェス頁岩の発見の経緯は、通説によると次のようです。「家族を連れて調査中の発見者のWalcottがカナディアン・ロッキーの急傾斜の山道を下っていたところ、夫人の馬が石につまずき、Walcottは馬を下りて邪魔な石を割ったところ、すばらしい軟体性のレースガニ



が黒い頁岩の面に銀色のフィルムとなって輝いていた」(これとは少し違う話が伝えられている)。この解説から、バージェス頁岩の古生物群集が、きわめて例外的な化石の保存と、全く偶然の発見という二つの「奇跡」が重なって初めて世界に知られるようになったことがわかります。これを発見したときの科学者の興奮が伝わってくるようです。次の堆積学的な背景では、なぜ普通は残らない化石が奇跡的に閉じこめられ保存されたのかを議論していますが、堆積学から見ても大変興味深い内容です。

今回の訳本では、原書と全く同じレイアウトで本文と図を配する工夫がされています。実際に原書と訳本を見比べると、各ページの体裁や雰囲気はいたるまで原書の持つ印象を全く損ねることなく忠実に再現されているのがわかります。さらに、ところどころ訳注が挿入されていて古生物学に馴染みのない者にもわかりやすい配慮がなされています。

こんなユニークな古生物学の教科書が日本語で気軽に読めるようになったのは大変ありがたいことです。初心者にとっては貴重な化石発見のドラマを綴った読み物として、また専門家にとっては座右の書の一つとして一読されることをお奨めします。この訳本を通じて古生物学愛好者の裾野がさらに広がっていくことを期待します。

(産総研 地圏資源環境研究部門 中嶋 健)